# 遊戯王GX ありきたりな生活

Fall/Out

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ　ありきたりな生活

【Ｎコード】
Ｎ６９３２Ｓ

【作者名】
Ｆａｌｌ／Ｏｕｔ

【あらすじ】
今まで周りに流されて色の無い人生を送ってきたリーマンがどこぞのありきたりなお話にトリップするいたって平凡な物語です。
暇な時の暇つぶし程度ですので更新速度、クオリティ共に期待しないでください。

## プロローグ（前書き）

初めて投稿します。
いたるところで不備があると思いますので指摘していただければ修正したいと思います。
それではどうぞ私の駄文にお付き合いください。

# プロローグ

いきなりこんな事を言うのもなんだが、俺は今まで流されて生きてきた。
親が良い学校に行けと言ったのでそこそこの中学、高校を卒業し、周りの同級生や親の意見等で大学に行き、教授の評価もそこそこのを貰い、卒業論文の担当の教授のこねを使って就職氷河期だなんだと騒がしい世の中で普通に就職し、今年で入社3年目となった。
仕事にも慣れ、後輩の面倒を見るのも板についてきた。
だが、これが俺の選んだ人生ではあるものの、今の人生に満足しているかと言うと正直、どうとも言えないのが現状だ。
あまりにも自分の意志と言うものを表に出さずに生きてきたために、自分が本当に何をしたいのかが分からなくなってしまっていた。
多分周りからすれば何を贅沢をと言われるかもしれない。
だが、俺からすれば安月給でも、売れないバンドをしていようとも自分の目標や夢を追っている友人達がとても眩しくて羨ましかった。
自分の自業自得だと言うことは理解していたし、まだ会社を辞めてやりたいことをやれる年齢であるのも分かっていた。
だが、やりたいことが無いうえに、何かをやろうとする気力さえ湧かなかった。
はっきり言って今の自分のこの状態を自業自得では無く、
「こんな流されるだけになってしまうような世界が悪いんだ。」
と的外れな恨み言の一つでも吐いて逃げてしまいたかったのだ。
そんなどうでもいいような事を考えながらその日は就寝した。

## TURN-01（前書き）

2話目です。

携帯で投稿しているのでどうしてもしっくりこないです。

## TURN|01

さて、ここは俺の夢の中のはずだが妙に意識がはっきりしてるし、目の前にちゃぶ台でお茶を啜ってるちっこいじいちゃんがいる。
なんとなく今後の展開が読めているが話して見ようと思ったり思わなかったりと逡巡していると向こうから声をかけられた。

「そこのお主、ちょっとこっちに座りなさい」

これ幸いと素直に従ってじいちゃんの向かいに座る。

「お主がぽつりと私に愚痴を吐いたので会いにきたのじゃ」

なんと律儀なじいちゃんだ。
あんなことでわざわざ出向くとは…

「はぁ」

無難にどうともとれる返事をしておく。

「私は神でありこの世界そのものなので君の世界への不満は私への不満となるのじゃ」

「はぁ」

「お主にはどこか別の世界へ行ってもらう」

「何故ですか？」

「ただの気まぐれじゃ」

俺は気まぐれで死亡同然の状態にされるそうです。

「他の世界って？」

「まだ決めてないから知らん。お主はどこに行きたい？」

「そんなすんなり出てくるわけないでしょ」

「なんじゃ、優柔不断じゃのう」

「この状況で「はい、ここです」と出てくるやつのほうが異常ですよ」

「そんなことはいいからさっさと決めんか」

段々とこの自称神（じいちゃん）の顔面に一発決めてやりたくなってきた。

老人でも自称＜神＞なら問題ないか。

「よし、決めた！お主を『オーディン・スフィア』の世界に送って

やろう」

あんたが決めたら俺今までと変わらないだろ…
何やら納得したのか頷きはじめる自称神（じいちゃん）
絞め落としてやろうか。

「あんたが決めたら意味ないでしょ」

「ん？そうなの？」

「そうなんです！」

マジでこのＩ自称神（糞爺）潰そうか。

どこがいいかな…
昔やってた『遊戯王』がいいかな？
ＧＸあたりだと敵全員弱いし馬鹿だし…
そうするか。　ガキっぽいのが多いのが気にかかるがそこらへんは我慢するしかないか。

「それじゃ、『遊戯王ＧＸ』でお願いします。Ｉ神様（糞爺）」

「なんか神様の部分だけ裏があるような気がするんじゃが…」

「多分、勘違いですよ」

とかなんとか曖昧な返事をしているといきなり巨大なハンマーをどこからか取り出し振りかぶり始めるI自称神（糞爺）…

あぁ、あれか…

昔懐かしい死亡移動もしくは転生と言うやつですか。

「これは目が覚めるだけで別に何でもいいんじゃけどな」

「んじゃ、もっと落ち着いて起きたいんですけど…」

「痛みはないからどれもたいして変わらん」

「あんたの趣味かよ」

なんとも適当なI自称神（糞爺）だ。

「俺の精神衛生的に危ないので勝手に一人で起きます」

「なんじゃ、つまらんのう…」

そんなに悲しそうな顔をしてもやってることはとんでもないことである。さすがに許容範囲外である。

「おぉ～、そうじゃ。カードは全種類渡しとくから適当にやってくれ」

ありがたい話だが相変わらず適当だ。

「部屋は今のアパートのをそのまま使って貰うからの。後、日にちは筆記試験の一週間前程にしておくからの」

そこら辺は良心的なんだ。
一週間か…
中学の俺って一週間あればなにするだろう。
当然の如く会社など行く必要もない。
とりあえず身の回りの整理からはじめて、後はだらだらと過ごそう。

などと考えていると…

「おぉ、そういえば今はもう１０時を過ぎてしまってるぞ」

「マジ？」

会社に出社するような時はいつも朝６時には起きていたのでそこまで長く寝ているのは久々だ。
健康面で体に悪いだろうなぁ。
生活のリズムはどうしても壊したくはない。
そろそろ起きたいな。

「どうすれば起きれるんですか？Ｉ神様（糞爺）？」
「どうも呼び方がひっかかるが…
起きたければこいつで…」
「ハンマー以外の方法ですよ。Ｉ神様（糞爺）」
「なら、眠れば目が覚めるぞ」

なんでもっと早くそれを言わないかな…
このＩ自称神（糞爺）は。

「んじゃ、眠るんで絶対に邪魔しないでくださいね。Ｉ神様（糞爺）」
「さっきからなんかひっかかるんじゃが…」
「じゃ、おやすみ」

夢の中で寝るとはこれまた不思議な感覚である。

まぁ、それで目が覚めるならと寝はじめる俺。
なんか、最後のあたりにＩ自称神（糞爺）が

「達者でな～」

と、手を振っていた気がする。

目が覚めるといつもと変わらない俺の部屋で、寝ぼけ眼を擦りながら洗面台の鏡を見て見るとそこには中学生の俺がいた。
そんなの当たり前のことなのだが一瞬誰か分からなかった。
学生手帳を確認して名前や住所を確認。
名字が変わっていた点を除けば特に目立った部分はなかった。
その後、朝食とも昼食ともつかない飯を食い、その後ネットで今の日本の状況を確認し、特に変わりがないようなのでゲームをはじめた。

ゲームは某核戦争後の荒野をさまよう洋ゲーだ。
結構はまってしまい気がつくと夕方だった。
一日の時間の使い方に少々後悔したがこんなものかと割り切り夕飯を作りはじめる。
その後、だらだらと過ごし一日が終わった。
また、I自称神（糞爺）が出てくるかと思ったがなんともなかった。
ほんと、何がしたいのか分からないI自称神（糞爺）だ。

その後もこんな感じでだらだらと過ごし気がついたら筆記テスト

の日になっていた。
部屋に受験票があったので筆記テストを受けに行く。

テスト内容は

＞『青眼の白龍』の攻撃力を答えよ。

受験者を馬鹿にしてるのかこのテストは。

その後も＜『クリッター』の効果の発動条件を答えよ。＞だの、＜神のカードは何枚あるか答えよ。＞だのとくだらない問題が続きテストは時間内終了した。
会場を確認したところ十代や翔がいたのでどんぴしゃのようだ。
なるべく関わりたくないが話の流れ的には無理だろうなと諦めながらテスト時間が終了した。
どうやら面接はないらしい。
ありがたい話だ。
まぁ、アカデミアは多分私立だと思うのでテストもそう関係ないのかな？
その後テストのレベルの低さに呆れつつ、さっさと帰宅した。

後日、筆記の結果と実技の受験票が届いた。

実技試験の受験番号が1番だった。
これで余計三沢の空気具合が増すのが確定してしまった。

実技試験当日。
可もなく不可もなくといったぐあいに俺は会場に到着した。
原作の三沢がかなり後ろのほうに決闘していたので多分俺も後ろのほうなんだろう。
待ってる間、この世界のレベルを確認してみようか。

会場は酷いありさまだった。
なんとか勝てました。といったぐあいの受験者がかなり多い。
ぎりぎりでも勝てるのであればまだいいがテスト用のデッキに1ダメージもあたえれずに負けていった人も多く、その場でプレイング指導が始まるのを眺めているこの時間がどれだけ無駄かを考えるのも馬鹿くさくなってきた。　呆れて物も言えなくなっていると意外な人物に声をかけられた。

「やぁ、初めまして。俺は三沢　大地だ」

三沢に声をかけられた。
さて、声をかけられるようなことをしたおぼえはないのだが…
いつまでも黙っているのも変なので返事をするしかないか…

「初めまして。俺は皇神（こうがみ）　飛翔（つばさ）。よろしく」

「あぁ、こちらこそよろしく」

そういえば俺の名前ははじめて出てきたな。
以前は鈴木と言うどこにでもいそうなモブっぽい名字だったのだがこちらに来たら皇神に変わっていた。
主人公っぽくてあまり気乗りしないが変わってしまったものはしかたがない。
名前は前の世界と一緒で飛翔とかいてツバサと読む。
俺の親もとんだ当て字を名前にしてくれたものだ。
そういえば三沢に話かけられていたんだったな。
すっかり忘れていた。
このころはまだ空気じゃない気がしたがもう片鱗をみせはじめたか。
可哀相なことだ…
俺には関係ないからどうでもいいが…
握手を交わすのはいいがいったい何の用だ？

「それで、何の用かな？」

「なに、筆記で同じく満点だった君と話してみたくてね」

「へ～」

ぶっちゃけ個人情報保護法違反もいいとこなんだが変に突っ込むとめんどいのでスルー。

「俺はアカデミアでトップを目指す。そのためには……」

「へぇ～」

何やら語りだしたが相手するのもめんどいので言いたいだけ言わせとくとしよう。

「と、言う訳で君には絶対に負けない！」

何がどういう訳かは知らんが、勝手に自己完結してくれたならそれでいい。

いちいち律儀に付き合う必要もないし、付き合わなければならないいわれもない。

「頑張りなよ」

と、在り来りな言葉で一応激励しておく。

色々と無駄な話をスルーしている間に俺の順番がまわってきた。

試験会場にはグラサンを掛けたモブっぽい先生が居た。

いちいちモブっぽい先生と言うのもあれなのでモブ先1号と呼ぼう。

モブ先1号「さぁ、決闘だ！」

いやに気合いのはいった先生だ。
お願いだから静かにやらせてくれ。

「それじゃ、さっさとやっちゃいましょう」

モブ先1号「あぁ！！」

何故そこまでハイテンションになれるのか。
こっちはさっさと終わらせたいのに。

「「決闘」」

「先攻は貰いますよ。ドロー」

手札はまずまずと言ったところ。
1ターン目からの様子見もできる手札だ。

「俺は手札より『オイスターマイスター』を守備表示で召喚し、手

札を2枚伏せ、ターンエンド」

まあ、初手はこんなもんでしょ。
一気に動けるような状況でも無いしね。

モブ先1号「私のターン！ドロー！！」

そんな魂込めなくても。結果は変わんないでしょうに。

モブ先1号「私は手札より『岩石の巨兵』を守備表示で召喚！カードを1枚伏せターンエンド！」

「エンドフェイズ時に『オイスターマイスター』をコストとし、リバース罠発動『フィッシャーチャージ』。相手のフィールドのカードを1枚破壊し、1枚ドローする。伏せカードを破壊。」

モブ先1号「何！？」

『オイスターマイスター』がカードに吸い込まれ代わりに飛び魚のような魚が何匹か発射され伏せカードが破壊された。

「俺は1枚ドロー」

「そして、『オイスターマイスター』の効果により『オイスタート

ークン』を守備表示で特殊召喚。そして、俺のターン。ドロー」

「俺は手札より『光鱗のトビウオ』を攻撃表示で召喚し、効果発動。『オイスタートークン』を生け贄に捧げ『岩石の巨兵』を破壊」

『オイスタートークン』が『光鱗のトビウオ』の鱗に吸収された。つづいて『光鱗のトビウオ』の鱗が何枚か剥がれ『岩石の巨兵』に飛んでいき、そのまま鱗が爆発し『岩石の巨兵』を破壊した。」

「続いて『光鱗のトビウオ』でダイレクトアタック」

『光鱗のトビウオ』が光だして辺り一面が真っ白になる。

モブ先1号「ぬぅぅ！」

モブ先1号LP4000→2300

「ターンエンド」

魚族としてはかなり手応えのある出だしだ。

このままおせればいいのだが…

モブ先1号「私のターン！ドロー！！」

モブ先1号「私は手札より『古のルール』発動！手札よりレベル5

以上のノーマルモンスターを特殊召喚できる！私は手札より『ネオ・アクアマードル』を守備表示で特殊召喚！！カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

やっぱり固めてくるか…

「俺のターン、ドロー」

この手札だと…

「手札より『テラ・フォーミング』を発動。『伝説の都　アトランティス』を手札に加え、発動。アトランティスの効果によりレベルが1下がっている、『超古深海王シーラカンス』を『光鱗のトビウオ』を生け贄に捧げ攻撃表示で召喚」

超巨大なシーラカンスが俺のフィールドに海底から浮上するようなかたちで現れる。

「手札より『死者蘇生』発動。効果により『光鱗のトビウオ』を墓地より攻撃表示で特殊召喚。さらにシーラカンスの効果発動。手札を1枚捨て、デッキよりレベル4以下の魚族を可能な限り特殊召喚する。俺はデッキより『オイスターマイスター』を2体と『ヒゲアンコウ』を1体、全て守備表示で特殊召喚する」

シーラカンスが決闘場に体を叩きつけると津波が発生した。
津波が去っていくとそこには魚が泳いでいた。
再び『オイスターマイスター』が2体となって俺のフィールドに現れた。ついでに変なアンコウも俺のフィールドに現れた。
2匹は全然魚っぽくないが…

「そして『オイスターマイスター』を生け贄にして『光鱗のトビウオ』の効果発動。伏せカードを破壊する」

モブ先1号「くっ」

伏せられていたのは『聖なるバリア　ミラーフォース』だった。

「『オイスターマイスター』の効果により、『オイスタートークン』を守備表示で特殊召喚する。そして、もう一度『オイスタートークン』を生け贄に捧げ『光鱗のトビウオ』の効果発動。『ネオ・アクアマードル』を破壊」

モブ先1号「くっ！」

「『超古深海王シーラカンス』でダイレクトアタック」

モブ先1号「ぬぁぁ～～」

モブ先1号LP2300→0

モブ先1号「くっ、試験終了だ。君ならきっと合格だろう。」

「んじゃ、帰りますんで」

歯ごたえないな～。
いくら試験用とは言え、弱すぎでしょ。
ま、合格出来るならどうでもいいけどね。
さっさと帰ってゆっくりしよう。
此処にいるとプレイングが下手な奴が多すぎて頭が痛くなりそうだ。

後日、合格証明書が届いた。
そんなに嬉しさとかはなかった。

## TURN-01（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。

3話目もきっと時間がかかると思います。

## TURN-02（前書き）

最近暇なときが多いので書いてみました。

## TURN102

さて、合格通知が届いてから日にちが過ぎてただ今ヘリにてアカデミアにむかっている最中。
しかし、たかだか新入生を連れて行くだけでヘリを出すとは…
思った以上にアカデミアの教師は馬鹿なのか…
船を使ったほうがコストパフォーマンスは断然いいし、何か事故があった場合も船のほうが生存率は格段に上がるのに。
定期便があるってことは船で行けるってことだから船を使うよりヘリを優先される理由が何一つ理解できない。
皆さんはどう思います？

さぁ、アカデミアに到着して現在入学式が行われている。
俺は毎年同じことしか喋らない校長のくだらない話など聞く気にもなれないので保健室で絶賛サボり中。
毎年大差ない内容ならロボットにやらせても同じではないのか。
などと愚痴っても出てないから関係ないけどね。

「入学式終わったみたいよ」

保険医の先生が教えてくれた。

「どうもありがとうございました。体育館に行ってみますね」
それなりの笑顔で答える。
さて、めんどくさいが体育館で制服を貰うとするか。

ところ変わって体育館。
制服が配布されていた。
予想通り俺はラー・イエローの寮だった。
上でもなく、下でもなくとちょうどいい部分にこれた。
俺としてはオシリス・レッドも面白そうなんだけどな…
まぁ、決まってしまったものはしょうがない。
　これからは影の薄い生活を楽しむとしよう。
さて、さっさと寮へ向かうとしよう。
荷物整理もしなくちゃならないしね。

寮へ向かおうと廊下を歩いていると前から万丈目一行が歩いて来た。
めんどくさいのでさっさと通ろうとしたらはちあってしまった。
「おい、ラー・イエローどけ」
一言目がこれか…
いったいどんな教育を受ければこんな風に育つんだろう。
親の顔が見てみたいな。

俺がこんなのの親だったら泣くね。確実に。
と、そうだった。
めんどいが話返さないといけないんだった。

「そっちのほうが人数多いんだから普通そっちがどかない？」

「なんだと！！お前この方が誰か知ってて言ってるのか！？」

なんか腰ぎんちゃくが割って入ってきた。
名前がわからんので眼鏡のを腰ぎんちゃくと、もう片方を金魚の糞と呼ぼう。

「知らん」

金魚の糞「この方は万丈目さんだ！！」

「万丈目？そんなやつ居たかな？」

腰ぎんちゃく「万丈目“さん”だ！！」

「はいはい。万丈目さんね～」

金魚の糞「貴様ぁぁぁ～！！」

万丈目「お前ら、もういい！」

腰ぎんちゃく&金魚の糞「万丈目さん。しかし…」

万丈目「おい、イエロー。この学園で生き残りたかったら立場はわきまえるべきだ。分かったか？」

「ご忠告どうも。お山の大将君」

万丈目「まだ、分かってないらしいな。口の聞き方には気をつけろ。俺はそんなに優しいほうじゃない。そして俺は万丈目“さん”だ。分かったか？」

「あぁ～、はいはい。分かったからさっさとどいてくれる？早く寮に行って荷解きしたいんだ。」

腰ぎんちゃく「貴様いったい何を聞いていた！！」

「ちゃんと聞いてたよ。こいつ万丈目でしょ？」

金魚の糞「万丈目“さん”だ！！」

「分かったってば。分かったからさっさとどいてよ。三人で横に並ばれちゃ通行の邪魔だから」

万丈目「貴様は何も分かっていないようだな。これからは自分の身をあんじることだな」

あらら、怒ってすたすたといっちゃったよ。
ま、いっか。さっさと寮に行って荷解きしよう。

その日の夜、万丈目からメールがきた。
内容はアンティ決闘だった。
なんで俺にまで…
これは主人公の役目だろ。
昼間の廊下でのせいか？

さて、アカデミア倫理委員会に通報するとしようかな…
確実な証拠もある訳だし。
馬鹿だよね～。顔ださなきゃよかったろうに。

電話中……

「えぇ、そうです。アンティ決闘を申し込まれました。これは立派な校則違反ですよね？」

「はい、はい。分かりました。それじゃ、やってみます」

さて、段取りもすんだし。

潰すか……

悪いのはあっちなんだしいいよね。

決闘場についたけど、早く来すぎたかなと思ったけど律儀にも先に来てるんだね。君達。

万丈目「遅かったじゃないか！逃げ出したかと思ったぜ」

「一つ確認するが本当にするのか？」

万丈目「何をだ？」

「アンティ決闘をだよ」

万丈目「当たり前だ！！今更怖じけづいたか？」

「お前から吹っ掛けてきたんだよな？」

万丈目「そうだ！！」

「後ろの金魚の糞と腰ぎんちゃくもそれでいいか？」

金魚の糞＆腰ぎんちゃく「「なんだと！！」」

あぁ、もう。

うるさいなぁ。

そういえば俺の近くには忘れちゃならない我らがＨＥＲＯ、「遊城

十代」君御一行がいたりする。
彼らもアンティ決闘に来ているはずだ。俺の原作知識が正しいのならね。

一応聞いてみようか。
無駄だろうけどね。

「君たちもアンティ決闘に来たの？」

十代「おう！なぁ、早くあいつと決闘してくれよ。そうじゃないと、俺が決闘できないんだとさ。」

「あっそ。」

うん、馬鹿だね君たちも。
ここにいなければもうちょっとましな学園生活のスタートをきれただろうに。
ここにいる時点で黒だから君らもまとめて御用だよ。
一切罪悪感のようなものはないけどね。
これは君にも言えるんだよ。上から涼しい顔で見ているじゃじゃ馬娘さん。
「んじゃ、残念だけどこの馬鹿騒ぎもここで終わりしようか。」
万丈目「何！？どう言うことだ！！」

「こう言うことだよ！」

俺が腕を上げた瞬間一斉に倫理委員会の人たちが決闘場に入ってきた。
意外と威圧感があるね。
ま、これだけ人数がいればそれも当たり前か。

倫理委員会Ａ「そこまでだ！おとなしくしろ！万丈目以下６名！」
万丈目「どう言うことだこれは！？」
「いや～。っちょこっとばっかし校則違反してる人がいますよ。って言ったらそんなのは許しておけんと立ち上がった方達がいたりするんだよ。これがまた。」
万丈目「貴様、倫理委員会にチクったのか！？」
「馬鹿を言わさんな。
俺はただ単にこんなことになったらどうします？って倫理委員会の人に質問してみただけだよ。」
万丈目「ぐぬぬぬぬ！！」
「あぁ、お前さんからのメールはきっちり渡してあるし、さっきからＰＤＡを通話にしてたから証拠不十分にはならないから覚悟しとくんだね。
お山の大将君。
んじゃ、後は頑張ってねぇ～、皆さん。」
さて、害虫駆除も終わったし、さっさと帰って寝るとしますかな。

後日、連絡事項の通知が配布された。
内容はアンティ決闘の発生と処罰についてだった。
どうやらレポート１００枚で見逃してもらったらしい。
完璧、自業自得なんだよなぁ、これ。

ま、これで馬鹿なことをするやつもいなくなるだろう。

## TURN102（後書き）

自分としては倫理委員会への報告は選択肢にあったと思います。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6932s/

---

遊戯王GX ありきたりな生活

2011年10月8日15時24分発行